

シカ被害が多発する立地環境の推定

新井一司・近藤徳高*
(緑化森林科・*畜産技術科)

【要 約】 再造林地において、シカ被害やシカの痕跡、センサーカメラの撮影頻度について調べたところ、シカは、林道などの道から離れ、傾斜が緩やかな棚状の地形に多く出没することが予測される。防除品の配置は、このような立地条件が適している。

【目 的】

ニホンジカ（以下、シカ）の防除品を再造林地に配置する場合、シカ被害が多く発生すると予測される場所に設置した方が高い効果が期待できる。加えて、再造林地の面積は広域であるため、事前に全域を踏査してから、防除品に最適な配置場所を決めるのは効率的ではない。そこで、再造林地内におけるシカ被害の状況やセンサーカメラによるシカの撮影頻度と再造林地の立地環境について調査し、シカ被害が多い立地条件を明らかにする。これにより、今後、防除したい林地において、事前に防除品が最も効力を発揮できる場所を推定することが可能となる。

【方 法】

ひとつの再造林地において、図1に示したように外周を踏査し、幅およそ3mのエリアにおけるシカによる植栽木の被害位置、シカの糞や痕跡の位置をGPS(GPSmap60CSx, Garmin)で記録した。このうちシカによる被害や痕跡が最も多く確認された位置を決め、そこが再造林地全体の斜面の上部あるいは下部に位置するか、地形の違い、林道や作業道など既設の道からの距離、傾斜の緩急で区分した。この踏査は、2011年から2016年に図2に示した21林地で行った。このうちの8林地には、3台以上のセンサーカメラ(HC500, Reconyx)を配置し、2014年の1年間で最も多くのシカが撮影されたセンサーカメラの位置について踏査時の区分と同様に行った。

【成果の概要】

1. シカの被害や痕跡は、図3に示したように斜面下部よりは斜面上部、地形は谷よりは尾根で多かった。林道など既設の道からの距離については、近くがゼロですべて遠い所であった。これは、シカが、下刈りの作業や狩猟者などが頻繁に出入りしやすい場所を避けていることによると考えられる。
2. 傾斜については、緩やかな場所が多く、これは、多摩地域の急峻な地形の中でも棚状といわれるわずかな幅の平らな地形をシカが多く利用していたことによる。シカは本来平地に生息するものであり、小面積であっても平坦な地形を好んでいるためと考えられる。
3. センサーカメラの結果も踏査とほぼ同様の傾向であった（図3）。
4. まとめ：再造林地においてシカは、林道など既設の道から離れた傾斜が緩やかな棚状の地形で最も被害を及ぼすことが予測された。このような場所に防除品を配置することが効果的である。

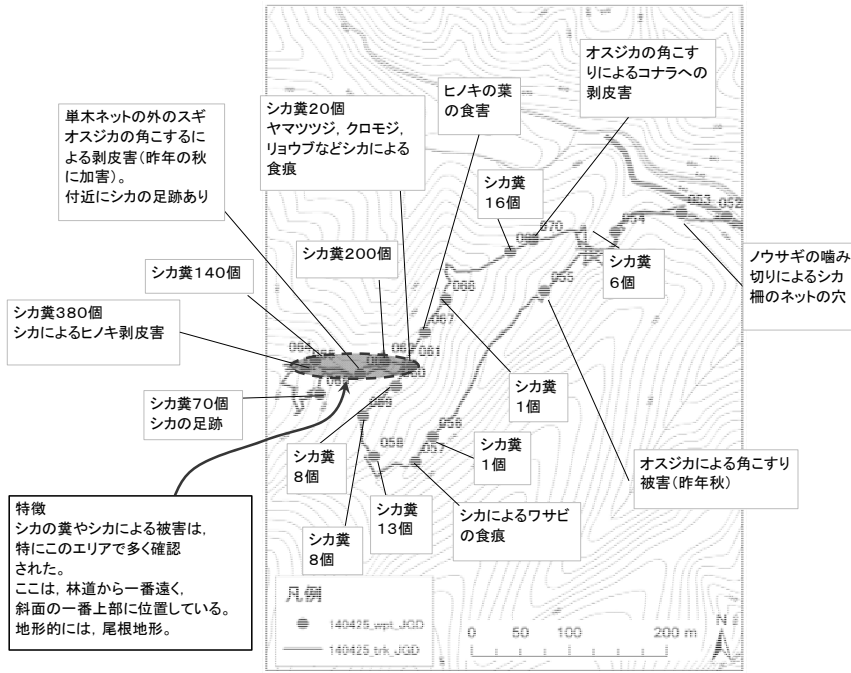


図1 再造林地の外周踏査による被害把握の一例

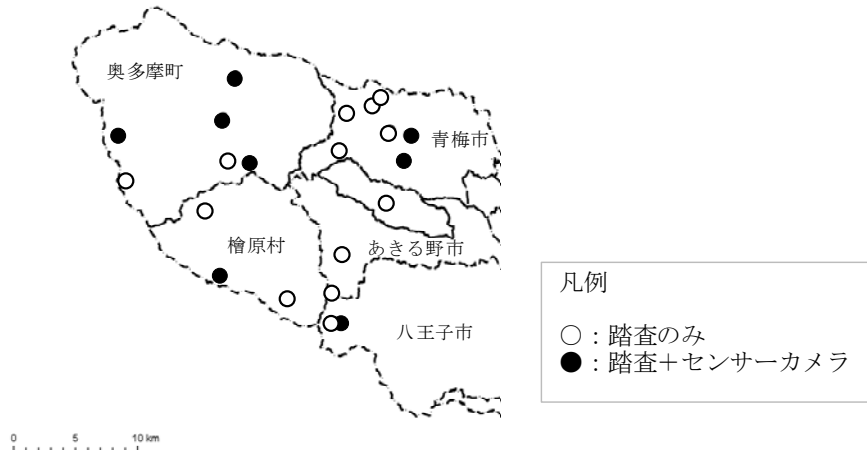


図2 調査位置図

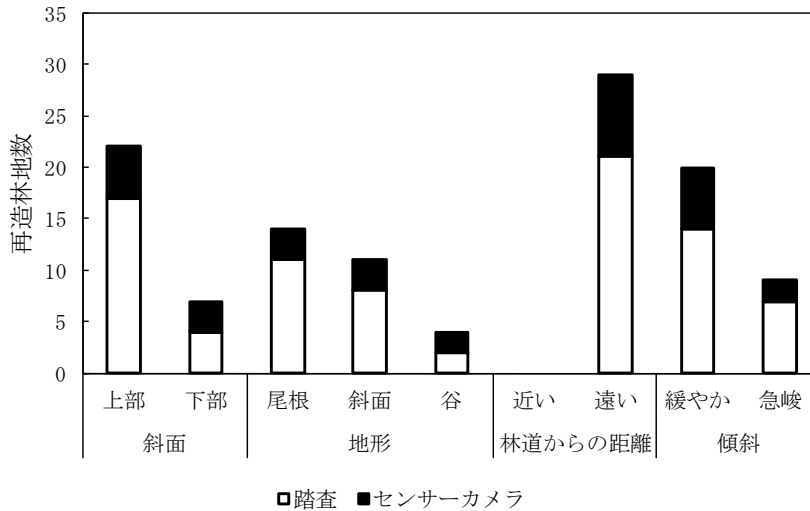


図3 シカの被害や出現が多い立地環境

※ ひとつの再造林地内において、踏査は、最もシカの被害や痕跡が多かったエリアで、センサーカメラは、複数台配置した中で最もシカが多く撮影された地点である。